

## 眠り姫

(著者名)福丸 梨佳

(あらすじ)女は友人に対して秘密を抱えながらも今まで親友の立場を守ってきた。しかし友人が結婚を控えたある日の飲み会で、酒に任せてその秘密を過去の笑い話にするために懺悔することにした。彼女は高校時代の過ちを思い出していた。友人が隠していた秘密にも気づかずに。

(文字数)4885 字

人間は馬鹿なので。誰しも、どんな聖人だって、大なり小なり何かやらかすものだ。それで、罪を抱えて生きていく。私だって、そう。あの子には言えない罪を抱えて生きている。それで、いつか懺悔できる日を今か今かと待っているのだ。

「結婚、結婚、ねえ」

「何、羨ましいの」

「羨ましい、っちゃ羨ましいけどお……」

嘘は言っていない。羨ましいと思う。結婚というものに夢を持っているわけではないが、やはり憧れるものだ。百合子が頬杖を突く左手を見る。薬指には小さなダイヤが我が物顔で居座って、きらきら輝いている。まるで私ににやりと笑いかけているみたいだ。何となく気に食わなくて目を逸らす。百合子は私に気づかずにクラッカーを齧った。クリームチーズの上のスモークサーモンが舌の上に乗って、するりと消える。私はそれを目で追って、小さく溜息を吐いた。

「どうなの、彼氏さんは。いや、もう旦那さんか」

「え？ それ聞いちゃう？」

百合子は心底嬉しそうな顔をして、左手を、指輪を撫でた。舌打ちしたいのをぐっところえて笑顔を張り付ける。「聞いちゃう聞いちゃう」なんて思ってもいけないことをよく吐けるものだ、と我ながら感心した。

「そうねえ、あの人はね、すっごく私を大事にしてくれてるの。私の話をよく聞いて、欲しい言葉を言ってくれる」

私だって、百合子が大事だった。誰よりも百合子の話を聞いて、百合子のために言葉を歌った。もしかしたら、余計な事ばかりだったかもしれないけれど。百合子には何も響かなかったかもしれないけれど。

「あとね、あの人と一緒にいると楽しいの。どこに行っても、何をしてても、つまらないことなんてない」

私と一緒にいた時、百合子はいつも笑ってたじゃない。私は楽しかった。この世の何より、百合子との時間が好きだった。百合子は、そうじゃなくても。

「一番はね、あの人に幸せになってほしいの。あの人を幸せにしたいって、思ったの」

私だって。私だって百合子に幸せになってほしかった。幸せにしたいと、思った。もう、遅いけれど。

私は椅子にもたれかかって、目を閉じる。瞼の裏は赤く光って、ちかちかと点滅した。瞼をゆっくり持ち上げると百合子がにこにこ笑っている。

「酔っぱらった？」

「……そうだね。きっとそうだ」

「お酒弱かったっけ」

「そんな日もあるよ」

目の上で手を組んだ。手のひらは冷たく、真っ白で弱々しい。指の隙間から光が漏れて、透明に光っている。

「……もう言っちゃってもいいかな」

「何を？」

きらきら、ちかちか。百合子の瞳が輝いている。何も知らない瞳に心臓が蠢いた。何を言っても許されてしまうような気がして、口が緩む。罪悪感も信仰心も酒でまぜこぜになって、するりと口から溢れ出た。

「私ね、百合子とキスしたことあるよ」

百合子の顔なんて見れなかった。目を閉じると、あの時のことは鮮明に思い浮かぶ。

高校二年生の時だった。ちょうど梅雨の時期で、その日も一日のほとんどをどんよりと重い雲が空を覆っていた気がする。私は二人分の荷物を背負いながら、保健室まで歩いていた。

「頭、痛あい……」

七時間目が始まる前に百合子は机に突っ伏して、うんうん唸っていた。私は百合子の机の前でいつもよりも小さな声で百合子に尋ねる。

「頭痛薬飲んだ？」

「飲んだあ……。でもぜんっぜんダメ。すごく痛い」

「低気圧かな」

「だから梅雨っていや。湿気で髪の毛ぐちゃぐちゃになるし。あーあ、はやく夏にならないかな」

「夏になったらなったで、暑いって文句言うでしょ」

「うん。さっちゃんよくわかってるね」

「そりゃあね」

私は百合子の頭を撫でた。これで頭痛が収まるとは思わないが、気休めになればいいなと願いを込めて。百合子は顔色が良くないくせにけらけら笑っている。それで、笑い声が頭に響いてまた顔を顰めた。先生がやってきてその場から離れ、席に着く。その間も百合子は頭を抱えて顔を顰めている。

「先生、頭痛いので保健室行きます！」

やけに元気な声で百合子が席を立った。先生は呆れたような顔で百合子を見て、しぶしぶといった感じで許可を出した。百合子の顔色が悪かったのは本当だからだ。百合子はわざわざ私の席まで来て、手を合わせる。

「さっちゃん、後でノート見せてね！」

「やったげるから早く寝てこい！」

百合子はふらふらしながらも嬉しそうに、重い足取りで教室から出ていった。私はついていくべきだったんじゃないだろうか、と思いながらも授業が始まるチャイムを聞いていた。

授業の内容はよく覚えていない。先生の顔から古文だったような気がする。あんまり集中していなかったのもあるけれど、やっぱり百合子のことを考えていた。百合子、大丈夫かな。倒れていたりしないかな、ちゃんと眠れているかな、なんて親みたいなことばかり考えていた。今思えば、友達にしてはおかしな考えだった。

気づいたら授業は終わっていて、古文の先生と入れ替わるように担任が入ってくる。あまり長々と話すのが好きな人ではなかったから、ホームルームは短く、帰りの挨拶とともにすべてががやがやと騒ぎ出す。私は自分の荷物をリュックに詰めながら百合子の机を見た。黒の通学鞆がぼつんと引っかかっている。

「先生」

気づいたら私は担任に声をかけ、百合子の鞆を持って保健室までえっちらおっちらと歩いていたのである。百合子と一緒に帰りたかったから。ここで大人しく百合子が戻ってくるのを待っていればよかったのに。

「あら、私今から会議なのよ。園田さんが起きたら帰っていいよ」

保健室の先生はそう言って、いそいそと扉から出ていく。私は何となくパイプ椅子に座って時計を眺めていた。保健室は私と百合子以外客はいないらしい。遠くでサッカー部と野球部の掛け声が聞こえるが、静かなように感じる。石鹸と消毒液の匂いが混じり合って、教室とも病院とも違う、独特の雰囲気漂っている。携帯を弄っていてもポスターの子どもがこちらを見ているようで落ち着かない。そのいつもとは違う、日常の中の非日常が私を狂わせた。私の気を惑わせて、私に罪を犯させた。

ふと、思ったのだ。百合子の寝顔はどんなものだろうか。見慣れた顔とはいえ、眠っている顔を見たことはない。だから、どんなに気の抜けた顔をしているのか拝んでやろうと思ったのだ。息を殺してカーテンに手をかける。チーという音とともに薄いカーテンはスライドして、籠った湿気が振り払われる。

「……ほんとに寝てる」

思ったことが自然と声に出てもカーテンが音を立てても、百合子は静かに眠り続けた。まるで人形みたいに、ぴくりとも動かない。ブランケットを被った薄い胸は小さく上下して、それで百合子が生きた人間だと再確認して息を吐く

あんなに曇っていたのが嘘のように雲が割れて太陽が燃えている。西日が窓から差し込んで、カーテンの隙間を縫って百合子の青白い顔を赤く照らした。百合子の艶のある、白いべ

ツドに散らばった黒髪がきらきら輝いている。そこに影がかかって、光が消える。私の影だ。

突然、百合子の唇が気になった。小さく開いた、薄桃色の薄い唇。それに吸い寄せられるように顔を近づけた。シャンプーの甘い匂いがして、思考力が奪われる。ニキビ一つない白い肌に触れるとひたりと吸い付いた。五センチ、四センチ、三センチ、二センチ、一センチ。百合子の吐息が顔にかかって、輪郭がぼやける。心臓がどくりどくりとやたら音を立てて、耳の奥で響いている。それでも私は止まれない。いけないことだ、ここで止まらなきゃと脳の片隅ではわかっているのに、このままいってしまえと本能が叫んでいる。

そしてそのまま私は百合子に、触れるだけのキスをした。一瞬だけ世界が止まって、それを振り払うように顔を上げる。んん、と百合子の唇から声が漏れて、急いで身体を起こした。ふると睫毛が震えて、ゆっくりと瞼が上がる。のろのろと起き上がって、百合子はぐうんと背伸びをしてあくびを噛み殺す。ぼんやりとした瞳に映る私は、どんな顔をしているのだろうか。

「あれ、さっちゃんおはよ。どうしたの？」

「別に。何でもないよ。頭痛はどう？」

「んー。痛くはないけどちょっと重いかも」

「あっ、そう。早く帰ろ」

私は早口で彼女に背を向ける。向かいの壁に掛かった鏡には、女が映っている。長い黒髪にセーラー服の、王子様になんてなれやしない女が、そこにいた。

「最低だろ、無抵抗の人間にキスしたんだぜ、私。百合子にだって、ダメに決まってる」

酒で茹った頭ではもう、自分が何を言っているのかわからない。築き上げてきたものは全部壊れるだろう。それだけのことをした。綺麗な善意に、下心を持ってしまった。許されるべきではないのだ。

「さっちゃん」

「好きだったの、百合子のことが。この世で一番」

最低だと分かっている。百合子の言葉を聞くべきなのに、遮るように言葉を発している。何の行動も起こさなかつたくせに今になって、手の届かないものになってから駄々をこねている。少しでも傷になって、残ってくればいいと願っている。酔ってればもうちょっと笑い話にできると思ってたのに、こんなにも情けない。

「さっちゃん、もういいよ。怒ってないよ」

「いいの、許さなくて」

私はそのまま机に突っ伏した。視界がぼやけて、口元が緩む。零れる笑みは何だろうか。

「私のことは忘れて、幸せになってね」

彼女は机に突っ伏したまま、動かない。私は立ち上がって様子を伺うと、すうすうと寝息が聞こえる。

「寝ちゃった？」

小さい声で呟いても、彼女は全く動かない。私は脱力して机の上のお皿やコップを台所へと運ぶ。かちゃかちゃ、じゃぶじゃぶ。静かな部屋に音は響く。

「バカだなあ、さっちゃん」

呟きは水の音に混ざって消える。そのまま食器をスポンジでよく擦った。油汚れが消えて、泡が流れていく。それを見守って、皿を一枚ずつ丁寧に拭いた。そして戸棚に全て納めると、小さく息を吐く。そのまま寝室に向かってブランケットを一枚持って彼女にかけた。そのまま元の椅子に戻って肘をつく。彼女のつむじを見ながら、あの時のことを思い出していた。

目が覚めたのは本当に偶然だった。人の気配がしたけど、もうちょっと眠りたかったから目を閉じていた。あの子の、さっちゃんの声がしたから少し驚かせようと思ったのもある。そしたら唇に何かが触れた。温かくて、柔らかくて、良い匂いのする何か。頭の中は爆発したようにめちゃくちゃになって、叫び出しそうな喉を締め上げるので精いっぱいだった。

嬉しかった。大好きなさっちゃんがこんなことをするほど私を想ってくれていたなんて。目覚めたふりのあとの不自然さも、どこか欠けた会話も、全部全部ちゃんと覚えている。大事に大事に、ここまで持ってきた。

きっと、さっちゃんは隠したいんだろうなと思っていた。あれ以来何もなかったから、私も何も触れなかった。そしてそのまま卒業して、大人になって、あの人と出会った。そして私は、これからずっとあの人と一緒に生きる。

「諦めちゃったのになあ、なんで今更」

さっちゃんの頭を撫でた。こうやって、さっちゃんが髪の毛を乱してくるのが好きだった。きっと、もうしてくれないんだろうな。もう私は、さっちゃんのものではいられないから。

さっちゃんの手を握ってみる。冷たくて気持ちがいい。ずっとこの手が好きだった。いつだってこの手が私を引っ張ってくれていた。きっともう握り返されることもないけれど。

「さっちゃん、さっちゃん」

立ち上がって髪の毛を搔き上げる。深い眠りについた、綺麗な顔。世界で一番好きだった人の顔。

「忘れてなんてあげない」

忘れてなんてやるものか。この終わった恋は私のものだ。私があの子まで綺麗なまま持っていく。さっちゃんにだって渡してなんてあげない。

「だからさっちゃんも覚えていてね」

私はあまりいい人間ではないので、さっちゃんの中で生きていきたいのだ。さっちゃんの小さな小さな、もう二度と消えない青春の傷で残ってきたいのだ。

「大好きよ、さっちゃん」

そうして私は、眠った私のお姫様の額にキスをした。さっちゃんは、眠ったままだった。